Trade Structure and Network between Asia and America during the 16th and 17th Centuries: Portuguese Intervention in the Manila Galleon Trade

Etsuko Miyata

Contents

Introduction 2-28

Chapter I

The Arrival of the Portuguese and the Spaniards in the Asian Waters

1. The Expansion of Iberian Powers towards Asia 29-33
2. Trade in the Asian Region before the Arrival of the Portuguese and the Spaniards and Their First Contacts 33-49
3. The Establishment of Manila 49-53
4. Manila and Macao Trade and Other Port Cities 53-60
5. Chinese in Manila 60-67

Chapter II

Commerce and Merchants in the Manila Galleon Trade

1. Flow of Goods from Manila to New Spain 68-83
2. Market Structure and Mexican Merchants 83-90
3. Participation of Religious Orders and Contraband 90-95
4. Merchant Diaspora and Network 95-99

Chapter III

Exported Chinese Porcelains in New Spain

1. Export Route from Southern China to New Spain 100-104
2. Chronology, Typology of the Exported Chinese Porcelain Excavated in the City of Mexico and its Change during the 16th and 17th Centuries 104-126
3. Material Culture and Porcelains in the Society of New Spain 126-130

Chapter IV

Distribution of Chinese ceramics and Asian products in the Spanish society

1. Archival Study on Asian Products Exported to Seville from Veracruz 134-137
2. Chinese Porcelains Excavated from Seville 137-153
3. Chinese Porcelains in Lisbon and the Galician Coast 154-171
4. Classification of Ceramics from Lisbon 171-180
5. Porcelain Trade from Lisbon to Amsterdam 181-185

Conclusion 186-190

Glossary 191-192

Appendix 1-16

Introduction

Trade Structure and Network between Asia and America during the 16th and 17th Centuries: Portuguese Intervention in the Manila Galleon Trade

本論文内容は、16，17 世紀を中心としてマニラ・ガレオン貿易が始まったころの交易の構造とその背後にある人的ネットワークを陶磁器資料と文献史料を通して明らかにしたものである。従来、マニラ・ガレオン貿易といえば、大量の銀がアメリカからアジアへと流れ込み、その経済と流通を世界経済へと結びつけたといったヨーロッパ世界中心的考え方が主流を占めていた。しかし、実際にはアジアはすでに 15 世紀に交易の時代に入り、活発な交易が地域内で行われていたところへヨーロッパ勢力がうまく入り込んでいったという構造であった。こうした状況を背景に繰り広げられたマニラ・ガレオン貿易について、誰が、どのような形で交易を行っていたのかを検証したものである。

15 世紀に王国の統一を果たしたポルトガルがまず海外進出を積極的に行い、香辛料を求めてアジアへと進出を図った。そして、ゴア、マラッカと続けて征服し、中国との交易を行おうと試みるが失敗し、1520 年代からポルトガルは“密貿易の時代”とよばれる時代に入り、1557 年にマカオが設立されるまで中国南部のリャンポー付近で中国人商人、日本人商人、東南アジアの商人達と私貿易を行っていた。一方スペインのカルロス一世の援助の下に大西洋からアメリカ大陸を南下し、マゼラン海峡を発見して一気に太平洋を渡ってフィリピンのセブ島へ到着したマガリャンイス（マゼラン）一行はのちのスペインのフィリピン統治の礎となった。

華やかに見えたスペインのアジア進出だったがアジアへと到達したスペイン人たちは、少人数で武器もなく、またフィリピン諸島にもミンダナオ島にそれほど質の高くないシナモンが取れるだけで他には輸出できる産物が何もなかったのが現状であった。そこで、1565 年の時点ですでにアジアの商業圏で 40 年ほどの経験をもち、マカオを 1557 年に正式に中国から貸借し、広東から直接中国の商品を持ち込める拠点として持っていたポルトガル人の力を借りて、初期のガレオン貿易はスタートしたと考えられる。実際に 1566、1567、1568 年と続けてフィリピンからガレオン船を送り、商品をヌエバ・エスパーニャ（現在のメキシコ）へと輸出していたことが史料からわかる。ガレオン貿易は特にマニラ在住の中国人商人たちを相手にスペイン人が銀と絹を交換していた、というイメージの強かった交易であるが、実は絹以外にも陶磁器をはじめ、漆器、蜜蝋、東南アジア諸国の香辛料、綿布、奴隷などの多くの商品がアメリカへ向けて運ばれていったことが文献史料とメキシコ市内で出土している多くの陶磁片の分析からわかった。またその交易の担い手も中国人だけでなく陶磁器や絹、綿布、奴隷などの調達はかなりの部分でポルトガル人たちに依存していたことが文献史料から読み取ることができる。同時にメキシコで出土する陶磁器のタイプがポルトガルの沈没船やリスボンにある博物館の伝世品と一致することから、ガレオン貿易の初期の段階でのポルトガル人たちの関与が明らかになった。その中でも特にコンベルソと呼ばれ、スペインで行われた宗教裁判を逃れてポルトガルへ渡り、その後中東やアジ

ア、そしてアメリカ大陸へと新天地を求めて行った改宗ユダヤ教徒達が独自の世界的ネットワークを持つ商人として大きな役割を担い、マカオーマニラーメキシコー大西洋を結ぶ交易ルートを構築していた可能性が文献史料から示唆することができる。
文献史料と考古学的資料である陶片資料からみていくと、ガレオン貿易の初期の段階ですでに陶磁器は商品の一部としてメキシコへと輸出されていったことが、発掘調査で出土したものの編年からわかり、すでに1560年代のものがメキシコ市の中心部から出土している。そして 1575 年ごろから 17 世紀はじめにかけて大量の中国陶磁器が輸出された。そのタイプは多く、さまざまであるが、最も多かったのは芙蓉手とよばれるタイプで、輸出用に生産された一枚の皿の内面が８から１０までのパネルで区切られ、その中に花文やタッセルが配置された“カラック磁器”ともオランダで呼ばれた陶磁器の種類である。これらは世界中で発見されているオランダ船やガレオン船の沈没船からも引き上げられていることからその需要も大きかったことが伺える。メキシコの中心地区である現在のゾカロ地区からはかなりの数量の芙蓉手の陶片が発掘されている。その大半が 16 世紀末から 17 世紀初めまでの数十年に集約されている。やがて 17 世紀半ばごろから陶片資料は全くと言って良いほど出土しなくなる時代がやってくる。これは明末清初の内戦の混乱によって、景徳鎮の窯業を停止せざるを得なかったことや遷海令によって中国南部の貿易活動がにぶったという歴史的事実と文献史料からの仮説、そしてもう一つの仮説としてコンベルソ達に対する宗教裁判が 1640 年頃までに非常に厳しくなり、ガレオン貿易に投資していた大商人達が活動できない状態に陥り、メキシコの商業、経済が低迷した可能性が高いことを示唆した。
その後 17 世紀第四四半世紀ごろから再び陶磁器が再び大量にメキシコで出土するようになる。これは、清朝の安定化により遷海令が撤回され、交易が再開したと考えられるが、陶磁資料をみると、その様相は 17 世紀前半と異なり、西洋的文様や器形ばかりが目立つようになり、特にコーヒーカップやチョコレート・カップと呼ばれているものが多くなる。これらは、アジアでは殆ど出土例が報告されておらず、その名前の通り、コーヒーやチョコレートを飲むための容器として輸出用に景徳鎮で注文生産されたものであることがわかる。特にチョコレート・カップに関しては 1670 年代からベネズエラのマラカイボから輸出される良質のカカオがメキシコへ向けて大量に輸出され、ヌエバ・エスパーニャで消費されるようになる時期と重なる。また、チョコレートを飲料として消費した人々の多くは教会や修道院などの宗教施設の人々であったことがその出土分布からわかる。17 世紀から 18 世紀のチョコレート・カップの多くは宗教施設からの出土であるのが考古学的事実だが、これはカトリックの神父や宣教師たちが断食の時期にチョコレートを飲料として飲んだ習慣と関連があると考えられる。
こうした陶磁器を中心としたアジアの商品は、一部メキシコからさらにベラクルスへと運ばれて、最終的にスペイン本国へと輸出されていったと考えられてきた。しかし、ベラクルスからセビリアへ向けて輸出されていったアジアの商品自体それほど多くなく、商品のほとんどは中国製絹であった。陶磁器に関しては、実際はスペイン国内で 16・17 世紀の中

国陶磁器が出土することは非常に少なく、陶磁器は文献史料からみると個人の所有物として少量運ばれていったにすぎないことがわかる。これはその背後に銀器を陶磁器よりも珍重する物質文化がスペインでは根付いていたことが遺産目録の中での銀器の多さでわかった。実際、当時世界でも最も豊かな港町として知られたセビリアの街から出土した中国陶磁器の数は 40 点に満たない。そして内陸部のマドリードでも出土例は確認されていないのが事実である。つまり 16 世紀後半から定着して行った中国陶磁器の輸出については、その殆どがヌエバ・エスパーニャで流通し、メキシコ市やその他の都市で消費されたり、ペルー、グアテマラ、パナマ、キューバ、フロリダなどラテンアメリカ全体に再分配されて行き、本国スペインまでは輸出されていなかったことがわかった。しかし一方で、その隣国ポルトガルではマカオから直接運ばれた陶磁器がリスボンへとたどり着き、大西洋交易でコンベルソ達が居住していたスペイン北岸地帯をとおってアムステルダムへと輸出されていったルートが存在していたことが明らかになった。この中国陶磁器のオランダへの輸出がのちにオランダがアジア進出を果たしたのちに大量に中国陶磁器を本国へと輸出し、中流階級までもが中国陶磁器を所有するほどの大きな需要を作り出す下地となったと考えられる。

こうして、銀と絹の交換といわれたマニラ・ガレオン貿易が、陶磁器資料と文献史料を付き合わせて見ることで、より複雑で世界的ネットワークへとつながっていくグローバルな交易であったことを証明した。そしてその交易に参加していた人々も従来言われていた中国人とスペイン人との交易という見方から、マカオを拠点としていたポルトガル人の介入の可能性へと広がりを見いだすことができた。また特にメキシコと大西洋の交易においてはグローバルに活躍していたポルトガル系コンベルソたち存在とその重要性を検証するに至った。彼らの存在は商業の歴史の中で詳細にまた実証的に語られることが少なく、文献史料と陶磁器という考古学的資料を組み合わせて考察を加えることで、彼らのネットワークを実証的に示すことができた。こうしたモノからみていく研究方法が歴史の再構築にいかに有益かを示すこともでき、今後こうした史料とモノの両方を利用して情報量を増やすことで、より豊かな歴史構築ができることを実証した論文となった。